

加東市

天神条里

— (主)小野藍本線 天神バイパス 社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —



令和6（2024）年3月

兵庫県教育委員会

加東市

天神条里

— (主)小野藍本線 天神バイパス 社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和6(2024)年3月

兵庫県教育委員会

例言

- 1 本書は、加東市天神他に所在する天神桑里の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、(主)小野藍本線 天神バイパス 社会資本整備総合交付金事業に伴うもので、兵庫県北播磨県民局加東土木事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3 調査の推移
(発掘調査)
試掘調査 令和2年7月30日・10月22日
実施機関：兵庫県立考古博物館 総務部埋蔵文化財課
本発掘調査 令和3年5月11日～同年6月18日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
工事請負：株式会社 西部
(出土品整理事業)
令和5年4月1日～令和6年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4 本書の編集・執筆は、第4章を除いて、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部 稲本悠一が担当した。なお、補助にあたった整理技術員個々の氏名は第2章第5節に記した。
- 5 本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会(兵庫県立考古博物館)で保管している。
- 6 遺跡の空中写真測量は、株式会社パスコに委託し、実施した。
- 7 遺物写真撮影は、株式会社地域文化財研究所に委託し、実施した。
- 8 調査成果の測量は、電子基準点「滝野」・「三田」・「三木」を基準として実施した。座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
- 9 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- 10 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、加東市教育委員会 藤原光平氏にご協力を得た。記して感謝の意を表します。

凡例

- 1 遺構の名称は、発掘調査時に、検出した全ての遺構に対して通し番号を付し、それぞれの遺構の種類を示す記号として、番号の頭にSK：土坑、SD：溝、SP：柱穴と表記した。
- 2 土器類の図版は、種類ごとの断面の表現を以下のように区別している。
土師器：白抜き / 須恵器：黒塗り / 貿易陶磁器：濃い網掛け / 陶器：薄い網掛け
- 3 土層などの色調については、小山正忠・竹原秀雄編『新版 標準土色帳』を使用した。

本文目次

第1章 遺跡を取り巻く環境	1
第1節 地理的環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 地形的環境	1
第2節 歴史的環境	3
第2章 調査に至る契機と経過	6
第1節 調査に至る契機	6
第2節 確認調査	6
第3節 本発掘調査	8
第4節 調査成果の公開	8
第5節 整理作業	9
第3章 調査成果	10
第1節 調査地点の概要	10
第2節 基本層序	11
第3節 遺構	12
1. 概要	12
2. 古墳時代の遺構	13
3. その他の遺構	15
4. 小結	16
第4節 遺物	17
1. 遺構に伴う遺物	17
2. その他の遺物	17
3. 小結	20
第4章 自然科学分析	21
第5章 まとめ	26
第1節 水田跡の評価と周辺の条里地割	26
1. 水田跡の考古学的評価	26
2. 周辺の条里地割	26
3. 小結	26
第2節 周辺遺跡からみた位置付け	28
1. 古墳時代後期	28
2. 中世	28
附表. 遺物観察表	29・30
報告書抄録（巻末）	

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第15図	足跡の可能性のある痕跡	14
第2図	天神三差路の近世の道標	1	第16図	SD 2 断面	14
第3図	加古川中流域と東条川流域の 地形分類図	2	第17図	SD 3 断面	15
第4図	天神条里周辺の地質分類図	2	第18図	SD 5 断面	15
第5図	栲鹿廃寺 塔心礎	3	第19図	SK 1 断面	15
第6図	主要遺跡分布図	4	第20図	遺構出土遺物	17
第7図	竣工後の調査地	6	第21図	包含層出土遺物(1)	18
第8図	確認調査・本発掘調査区の位置	7	第22図	碗(17)の墨書	18
第9図	調査成果解説ポスター	8	第23図	包含層出土遺物(2)	19
第10図	情報誌での動画公開	9	第24図	植物珪酸体含量	23
第11図	調査区土層断面図	10	第25図	花粉分析プレパラート内の状況・植物 珪酸体	25
第12図	調査区平面図	12	第26図	周辺地図(上)と条里地割の 復元案(下)	27
第13図	水田跡と関連遺構	13			
第14図	水配りの想定模式図	14			

表目次

第1表	周辺の主要遺跡	4	第4表	花粉分析結果	22
第2表	時期別にみた検出遺構の概要	16	第5表	植物珪酸体分析結果	23
第3表	試料一覧	21			

写真図版目次

- 写真図版 1** 1. 遠景(西上空から)
2. 遠景(南東上空から)
- 写真図版 2** 1. 遠景(東上空から)
2. 遠景(北西上空から)
- 写真図版 3** 1. 近景(南西上空から)
2. 近景(北西上空から)
- 写真図版 4** 調査区全景 俯瞰写真
- 写真図版 5** 1. 調査前の状況(東から)
2. 調査前の状況(西から)
3. 人力掘削状況
- 写真図版 6** 1. 全景(東から)
2. 全景(北東から)
3. 西壁断面(北東から)
- 写真図版 7** 1. 調査区西半の水田跡(北から)
2. 水田1～4畦畔接続部(北から)
3. 水田2東側畦畔とSD2(北から)
4. 水田4南畦畔断面(東から)
5. 水田畦畔検出作業
- 写真図版 8** 1. SD2・3検出状況(北から)
2. SD2・3全景(北から)
3. SD2断面(A-A')(北から)
- 写真図版 9** 1. SD2断面(B-B')(北から)
2. SD2遺物(1)出土状況(北東から)
3. SD3断面(北から)
- 写真図版 10** 1. SK1検出状況(南から)
2. SK1断面(南から)
3. SD5断面(北から)
4. SD5完掘状況(北から)
5. SP6断面(西から)
6. SP7断面(北から)
7. 遺構実測作業
8. ラジコンヘリによる空中写真撮影
- 写真図版 11** 上 遺構出土遺物
下 包含層出土土器(1)
- 写真図版 12** 包含層出土土器(2)
- 写真図版 13** 包含層出土土器(3)
- 写真図版 14** 包含層出土土器(4)
- 写真図版 15** 上 包含層出土土器(5)
下 包含層出土貿易陶磁器
- 写真図版 16** 包含層出土土器(6)
- 写真図版 17** 包含層出土陶器

第1章 遺跡を取り巻く環境

第1節 地理的環境

1. 遺跡の位置

天神条里は、加東市天神他に所在する。当遺跡が所在する加東市は、兵庫県中央部やや南より、播磨平野内陸の最東北部に位置する（第1図）。加東市は、東側が丹波篠山市、三田市、南側が三木市、小野市、西側が加西市、北側が西脇市とそれぞれ接しており、市域の総面積は157.55km²である。遺跡の所在する持鹿谷は加東市の東部に位置し、旧東条町にあたる。旧東条町は、東側が三田市、東・南側が三木市、南西側が小野市とそれぞれ接しており、遺跡は旧東条町域のほぼ中央に位置する。町の沿革は、明治22年（1889）の市町村制の施工により誕生した加東郡上東条村、中東条村が昭和28年（1953）の町村合併促進法に伴い合併され、昭和30年（1955）に加東郡東条町となった。その後、平成18年（2006）年に同郡社町、滝野町と合併し、現在の加東市となった。

当地は旧国でいえば、摂津・播磨・丹波の接点に近接し、交通の要衝に当たる。江戸時代には、京街道・大坂街道が通っており、「右大坂兵庫」、「左京きよ水」と刻まれた当時の道標が市街の中心付近の天神三差路に現存する（第2図）。現在では、東条川に沿って県道小野藍本線が敷設されているほか、町の中央部を東西方向に中国自動車道が横断しており、町内には、ひょうご東条インターチェンジが存在するなど、阪神地域と直結しており、交通の便は良い地域である。



第1図 遺跡の位置



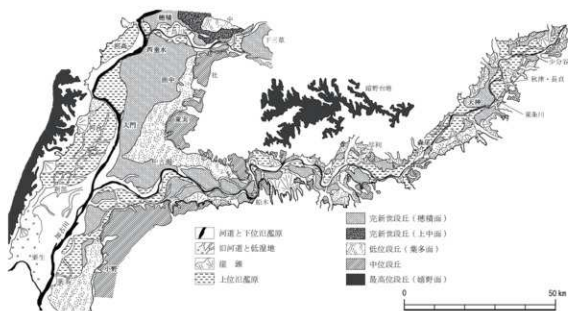
第2図 天神三差路の近世の道標

2. 地形的環境

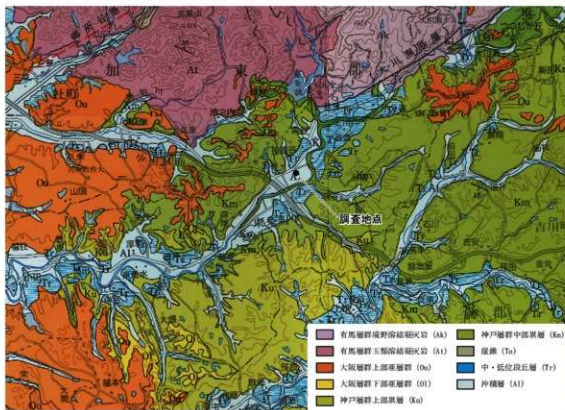
加東市の地勢は、北部から北東部にかけて、中国山地から連なる御嶽山、三草山、五峰山などに囲まれる。また加古川などの河川に沿って河岸段丘と沖積平野が形成されており、南部には扇野台地、加古川西岸には青野ヶ原の丘陵地が広がる。河川は、加古川とその支流である東条川、出水川、千鳥川、吉馬川、油谷川などが流れる。

遺跡の所在する旧東条町について詳しくみると、旧社町との北の境界付近にある秋津富士（標高320m）など、北東部には清水・三草山地が含まれるが、地域の大半は北部の扇野台地や、南部の新定台地と呼ばれる高位段丘からなる。標高は町域の北北東ほど高く、西に向かって低くなる。町の中央を南西方向に東条川が東から西へと蛇行しながら流れ、東条川やその支流に沿って河岸段丘や浸食谷が発達し、谷底平野が形成されている。

旧東条町を貫流する東条川は、長さ約40kmを測る加古川の支流で、丹波篠山市に源を発し、小野市



第3図 加古川中流域と東条川流域の地形分類図 (成瀬1996を再トレース・加筆)



第4図 天神条里周辺の地質分類図 (兵庫県1996を一部改変・加筆)

喜多町で本流へと合流する。その流れは、三田市を経て南北方向に旧東条町へ流入し、秋津・長貞地区から天神地区周辺にかけて蛇行を繰り返し、東西方向に流路を変え、小野市域へと至る。流域には段丘、氾濫源が発達する(第3図)。

天神条里は東条川北岸の河岸段丘上に立地する。地質的には、沖積層にあたる。蛇行しながら南流する東条川が西側へと向きを変える地点に近く、川からの距離は約230m、標高は約86.4mで、東条川の河床との比高差は約10.0mである。周辺には田地が多く、調査地点も田地であった。

第2節 歴史的環境

本節では、天神条里周辺、旧東条町の歴史的環境について概観する。概観にあたっては、発掘調査が行われた事例を中心にみていく（第6図・第1表）。

縄文時代 長貞・三尾山遺跡（2）では、前期の北白川下層式の深鉢と多量の石鏃・石匙などが出土した。

弥生時代 周辺では、中期以降の集落域と墓域が確認されている。

長谷・ワキカセ遺跡（3）では当該期の竪穴建物跡が検出された。栲鹿谷・松ノ下遺跡（4）では、中期の土器棺墓、中期後半の木棺墓3基、後期後半の竪穴建物跡2棟などが検出された。1棟は方形の平面プランを有する焼失建物跡、もう1棟は五角形あるいは六角形の平面プランを有する特徴的なものである。また、黒谷・岡ノ上遺跡（5）では、中期後半の円形周溝墓4基・方形周溝墓1基、竪穴建物跡などが検出された。

古墳時代 周辺では中期末以降の集落域と古墳が確認されている。

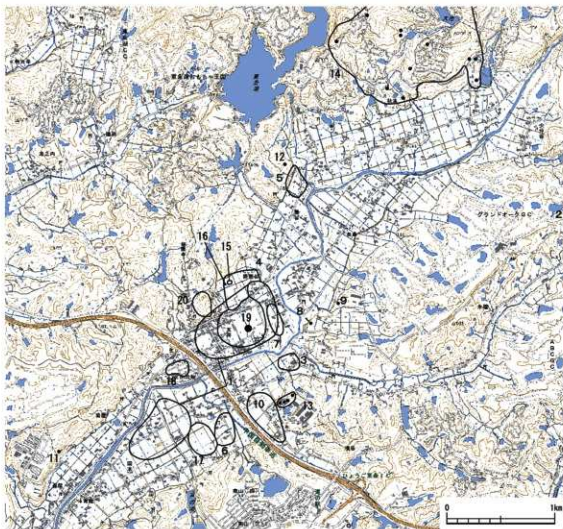
集落 栲鹿谷・松ノ下遺跡（4）では、5世紀末（中期末）と6世紀後半（後期後半）の竪穴建物跡が、森・番田遺跡（6）では6世紀前半（後期前半）の竪穴建物跡が検出された。黒谷・岡ノ上遺跡（5）では、6世紀代（古墳時代後期）の焼失建物とみられる竪穴建物跡が検出された。その他にも、栲鹿谷・東萩原遺跡（7）で6世紀後半の須臾器を含む土坑が検出された。

古墳 東条川流域では、5世紀後半～6世紀初頭頃に造営が開始され、経塚古墳（8）、長井古墳（9）などが旧東条町最古のものと考えられている。横谷・菊沢遺跡（10）では、円墳の周溝が複数検出されており、8基の円墳の存在が想定されている。周溝のみの検出で、埋葬方法などは不明であるが、木棺直葬とみられ、東条川流域において横穴式石室が導入される6世紀中頃より先行するものと考えられている。6世紀末～7世紀になると岩屋古墳（11）、黒谷古墳（12）などの古墳が単独で造られるほか、木棺直葬墳と横穴式石室が混在する横谷・石谷古墳群（13）や、横穴式石室を埋葬施設とする古墳群が造られる。後者には秋津富士の山麓に位置し、加東市指定文化財の2号墳・3号墳が含まれる秋津古墳群（14）などが知られている。

古代（奈良時代～平安時代前半） 周辺は『播磨国風土記』にみえる、賀茂郡端鹿里に比定される。また、平城宮東院地区では「播磨国賀茂郡栲鹿郷銭一貫」と記された荷札木簡が出土しており、「倭婆塞貢進解」には「播磨国賀茂郡栲鹿郷尸主文連麻呂」の記録がある。端鹿里は栲鹿あるいは栲鹿と表記を変えながらも、少なくとも8世紀半ばまで存続したことが指摘される（村上2021）。遺跡に注目すると、東条川北岸の段丘上には栲鹿廃寺跡（15）が存在し、法隆寺式に類似する伽藍配置が復元されている。栲鹿廃寺の塔心礎は、加東市指定文化財に指定されており、現在も栲鹿谷地区に残されている（第5図）。栲鹿廃寺の西側には、当寺の瓦を生産した栲鹿谷瓦窯跡（16）が存在し、奈良時代後半頃の平窯2基が発掘調査された。これらは、兵庫県下では最古の平窯である。付近の栲鹿谷・松ノ下遺跡（4）では、当該期のものとみられる掘立柱建物跡が確認されており、寺院と関連する集落あるいは施設と想定されている。対岸の東条川南岸の段丘上では、森・芝山遺跡（17）から円面硯、横谷・菊沢遺跡（10）から青銅製の巡方が出土しており、周辺に官衙的な施設の存在が推定される。



第5図 栲鹿廃寺 塔心礎



第6図 主要遺跡分布図

(国土地理院発行の電子地形図25000「65 比延」・「75 天神」に加筆し作成)

第1表 周辺の主要遺跡

番号	遺跡名	遺跡番号	所在地	主な時代
1	天神桑里	250057	加東市天神池	古墳
2	長貞・三尾山遺跡	250001	加東市長貞	縄文
3	長谷・ワキカセ遺跡	250005	加東市水福	弥生・中世
4	掲鹿谷・松ノ下遺跡	250062	加東市掲鹿谷	弥生・古墳・古代・中世・近世
5	黒谷・岡ノ上遺跡	250064	加東市黒谷	弥生・古墳・中世
6	森・番田遺跡	250027	加東市森	古墳
7	掲鹿谷・東萩原遺跡	250063	加東市掲鹿谷	古墳・中世・近世
8	経塚古墳	250015	加東市長井	古墳
9	長井古墳	250013	加東市長貞	古墳
10	横谷・菊沢遺跡	250008	加東市横谷	古墳・古代・中世・近世
11	岩屋古墳	250024	加東市岩屋	古墳
12	黒谷古墳	250016	加東市黒谷	古墳
13	横谷・石谷古墳群	250021・250080～250082	加東市横谷	古墳
14	秋津古墳群	250019・250068～250079	加東市秋津	古墳
15	掲鹿院寺跡	250030	加東市掲鹿谷	古代
16	掲鹿谷瓦窯跡	250065	加東市掲鹿谷	古代
17	森・芝山遺跡	250029	加東市森	古代
18	天神・戸坂遺跡	250032	加東市天神	中世・近世
19	天神・竹森遺跡	250044	加東市天神	中世
20	天神山城跡	250037	加東市天神	中世

中世（平安時代後半～室町時代） 当該期の遺構・遺物は多く確認されている。

摘鹿谷・松ノ下遺跡（4）では、平安時代後半頃、室町時代の掘立柱建物跡に加え、平安時代末期から鎌倉時代初頭の木棺墓2基が検出された。木棺墓のうち1基からは同安楽系の白磁碗、須恵器、鉄製品が出土した。天神・戸坂遺跡（18）では、多量の掘立柱建物跡、畝状遺構、土坑、溝などが検出されており、須恵器、土師器、貿易陶磁器（青磁碗・白磁碗）、四耳壺、天目茶碗、木製品などが出土した。横谷・菊沢遺跡（10）では、掘立柱建物跡や溝、井戸などが検出されており、龍泉窯系青磁碗や白磁碗（12世紀後半～13世紀前半）などが出土した。他にも、黒谷・岡ノ上遺跡（5）では同安楽系の青磁皿（13世紀前半）が出土し、室町時代の掘立柱建物跡が検出された。長谷・ワキカセ遺跡（3）では、鎌倉・室町時代の掘立柱建物跡や溝などが、天神・竹藪遺跡（19）や摘鹿谷・東萩原遺跡（7）では溝・土坑などが検出されている。

このように、中世の遺構・遺物は一部が室町時代にまで下るものの、およそ平安時代後半から鎌倉時代に収まるものが多い。貿易陶磁器の出土量が少なくない点も注目される。その他にも、旧東条町域を見渡せる尾根の先端に天神山城跡（20）が築かれている。

近世（江戸時代） 近世になると、京街道・大坂街道が通じ、平野部や段丘上においては、水田化が進み、集落はほぼ現在と近い位置に立地するようになったと推測されている。摘鹿谷・松ノ下遺跡（4）、横谷・菊沢遺跡（10）、天神・戸坂遺跡（18）において溝・土坑などの遺構が、摘鹿谷・東萩原遺跡（7）では水田に伴うとみられる石組の暗渠が検出された。

【主要参考文献】

- 今芳也1998『横谷・菊沢遺跡—横谷地区団体営園場整備、町道敷設にかかる調査—』加東郡埋蔵文化財報告21 加東郡教育委員会
- 今芳也2001「9 天神・戸坂遺跡（3次）」『埋蔵文化財調査年報—2000年度—』加東郡埋蔵文化財報告27 加東郡教育委員会
- 今芳也2005『摘鹿谷・東萩原遺跡—（主）小野藍本線道路改良事業にかかる第4次調査（E地点）—』加東郡埋蔵文化財報告34 加東郡教育委員会
- 加東郡教育委員会編1973『加東郡誌』臨川書店
- 加東郡教育委員会2000『天神・戸坂遺跡 現地説明会資料』
- 奈良文化財研究所編2007『平城宮発掘調査出土木簡概報（三八）』（付『平城京出土木簡—補訂（四）』）
- 成瀬敏郎1989「I、加古川中流域と東条川流域の段丘・沖積平野の微地形と稲作をめぐる古環境」『加東台地の開発と地域変容—兵庫県社町研究学園都市の自然と社会をめぐる—』61-76頁
- 村上菜葉2021「古代日本の村と里」『古代文化』第73巻第2号 古代学協会 180-200頁
- 兵庫県教育委員会2020『兵庫県遺跡地図』
- 森下大輔1989「10 天神・戸坂遺跡」『埋蔵文化財調査年報1987年度』加東郡埋蔵文化財報告9 加東郡教育委員会 40-51頁
- 森下大輔・今芳也2004「7. 摘鹿谷・松ノ下遺跡」『埋蔵文化財調査年報—2002年度—』加東郡埋蔵文化財報告31 加東郡教育委員会 30-62頁
- 森下大輔2009「天神・竹藪遺跡確認調査」『加東市内遺跡試掘確認調査概報』加東市教育委員会 18-25頁
- 兵庫県1996『兵庫の地質—兵庫県地質図解説書・地質編—』

第2章 調査に至る契機と経過

第1節 調査に至る契機

本報告書は、令和3年度に兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した、天神条里発掘調査の報告書である。

今回実施した調査は、兵庫県北播磨県民局加東土木事務所が計画する（主）小野藍本線 天神バイパス 社会資本整備総合交付金事業に伴うものである。小野藍本線は、小野市の国道175号を起点とし、加東市を経て、三田市藍本の国道176号を結ぶ幹線道路である。旧東条町の中心地を通り、生活道路として重要な役割を担っている。ただし、現道区間は幅員狭小であり、自動車の円滑な交通の確保、歩道未整備区間の解消とともに、現道の交通を天神バイパスに転換させ、自転車・歩行者の安全性確保、区画整理事業と一体となって整備し、まちづくりの支援、地域の活性化を図ることなどを目的に事業が進められていた。

当事業用地内の埋蔵文化財調査は、当時の兵庫県北播磨県民局加東土木事務所の依頼を受け、加東郡教育委員会によって、平成13年度・平成14年度に摘鹿谷・荻原遺跡の確認調査、平成16年度に同遺跡の全面調査が行われた。

そして、当事業の最後の施工区間については、本章第2節で述べるように、令和2年度に兵庫県教育委員会主体の確認調査が行われ、一部において埋蔵文化財の包蔵が確認された。確認調査の成果を受け、令和3年度には本章第3節で述べる本発掘調査が実施された。本発掘調査時には、調査地点の東西両側まで既に道路工事が完了しており、事業用地の中で施工が唯一残されている場所であった。調査終了後は速やかに埋め戻し、道路の施工が行われ、令和4年12月に天神バイパスが完成、令和4年1月から供用されている（第7図）。



第7図 竣工後の調査地（東から）

第2節 確認調査

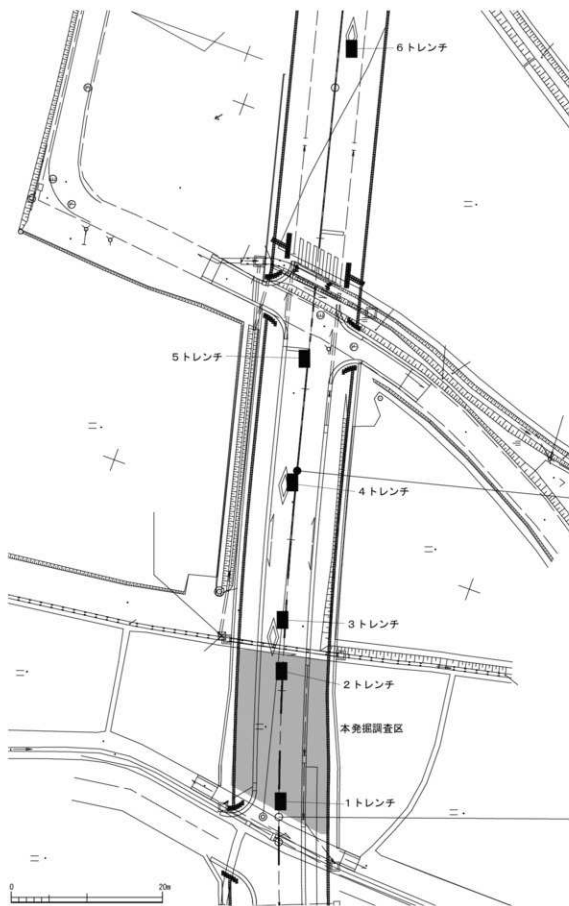
兵庫県北播磨県民局加東土木事務所が計画する（主）小野藍本線 天神バイパス 社会資本整備総合交付金事業の事業用地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である天神・竹蔭遺跡（遺跡番号：250044）及び天神条里（遺跡番号：250057）の範囲内に含まれることから、事業の実施に先立ち確認調査を実施した。概要は以下の通りである。

遺跡調査番号 2020067

調査地 加東市摘鹿谷

調査期間 令和2年7月30日・10月22日

調査主体 兵庫県教育委員会



第8図 確認調査・本発掘調査区の位置

調査担当	兵庫県立考古博物館総務部埋蔵文化財課 永恵裕和
調査概要	事業用地内に、東西方向におおむね一辺1.5～2mの確認調査トレンチを6箇所設定し、調査を行った（第8図）。調査面積は合計24㎡である。調査の結果、西端の2箇所（1・2トレンチ）で遺構・遺物が確認され、埋蔵文化財の包蔵が明らかになった。

第3節 本発掘調査

確認調査の結果、事業用地内に埋蔵文化財の包蔵が明らかになったため、北播磨県民局加東土木事務所からの調査依頼を受け、本発掘調査を実施した。なお、当該地については、周知の埋蔵文化財包蔵地として、先述の天神・竹森遺跡（遺跡番号：250044）と天神条里（遺跡番号：250057）が重複する地点であったが、天神条里の発掘調査として実施した。天神条里は所在地が加東市天神他となっているように、範囲の広い埋蔵文化財包蔵地であるが、今回調査したのは包蔵地の中の東側、加東市栲鹿谷の一角である。調査の概要は以下の通りである。

遺跡調査番号	2021005
調査地	加東市栲鹿谷
調査期間	令和3年5月11日～令和3年6月18日
調査面積	261㎡
調査主体	兵庫県教育委員会
調査担当	（公財）兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部 調査第1課 稲本悠一 別府洋二
調査概要	調査は、埋蔵文化財が包蔵されていると考えられる深度まで機械によって掘削し、それ以下を人力によって掘削した。具体的には、調査区西側から人力掘削と遺構面精査を行い、検出した遺構は順次記録を取りながら掘削を進めた。 調査成果の記録については、効率化を図るため、令和3年6月9日に無人航空機（ラジコンヘリ）により空中写真測量を行い、その成果を元に平面図を作成した。調査後の遠景写真も合わせて撮影した。

第4節 調査成果の公開



第9図 調査成果解説ポスター

調査中のポスター掲示 調査期間中は、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う3回目の緊急事態宣言が出されていた時期であり、また調査期間が限られていたこともあって、現地説明会を行えなかった。しかしながら、調査地西側の道路が小学校の通学路となっており、地元の方々の往来や時には見学もあったことから、発掘調査成果についての解説ポスターを作成し、調査区西側フェンスに掲示することで、成果の公開を試みた。ポスターは通常のもの、子供向けに文章表現を

簡易にしたものの2種類を用意した。足を止めてポスターを読む通行人の姿も見受けられ、簡易ながらも調査成果の公開に役立ったと考える(第9図)。

情報誌『ひょうごの遺跡』と動画公開

(公財)兵庫県まちづくり技術センターでは、1年に2回、情報誌『ひょうごの遺跡』にて、発掘調査成果の速報を公開している。天神条里については、104号(令和3年10月刊行)に調査成果を掲載した。通常は、紙面のみであるが、当遺跡については、調査成果をまとめた動画を作成、インターネット上(Googleドライブ、<https://drive.google.com/file/d/1cSyt4ptu2sJNFbywqaSYPzptAlufK9tw/view>)にアップロードし、これを閲覧するためのQRコードを掲載した。QRコードを読み込めば、動画を閲覧できるというものである(第10図)。当センターの調査成果公開において、動画という方法を取ったのがこれが初めてであった。なお、動画は、調査担当者の稲本が作業中の映像や遺構の様相を、発掘調査工業者がドローンを用いて周辺環境等の撮影を行っており、これらの映像を整理保存課の大嶋昭海が編集し、作成した。



第10図 情報誌での動画公開

(右上にQRコード)

第5節 整理作業

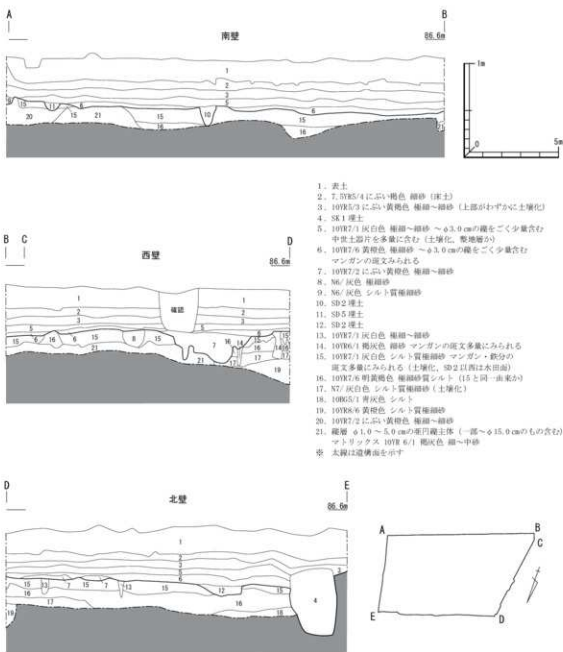
天神条里の整理作業は、令和5年度に単年で行った。概要は以下の通りである。

整理体制	(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
整理保存課	深江英恵・大嶋昭海・野田優人・稲本悠一・別府洋二
整理技術員	(水洗い・ネーミング) 栗山美奈・花房伸予・藤尾裕子・大本昌子・藤田久範 (接合・実測・トレース・レイアウト) 荻野麻衣・前田陽子・平宮可奈子・森松沙耶香・新山玉綾子・富永愛子
整理概要	出土遺物の水洗い、ネーミング、接合・補強、実測、復元、写真撮影、写真整理、遺構図補正、トレース、レイアウト、原稿執筆、分析鑑定の一連の作業を実施後、編集作業を経て本報告書の刊行に至った。また、分析鑑定については、パリオ・サーヴェイ株式会社に花粉分析・植物珪酸体分析を委託し、その成果を本書に掲載した。

第3章 調査成果

第1節 調査地点の概要

今回調査した地点は天神条里の包蔵地の中でも東側に位置し、地形的には、東条川北岸に発達する河岸段丘上に位置する。標高は約86.4 mの地点である。調査地点の周辺には多くの田地が広がっており、調査地点も調査前には田地として利用されていた。今回の調査では、当地に道路の計画に合わせ、およそ台形を呈する調査区(面積:261㎡)を設定した(写真図版3~6)。調査面積は1面で、遺構面は現地表面より約50~60 cm下である。



第11図 調査区土層断面図

第2節 基本層序

調査区の土層堆積状況については、東壁を除く西南北の壁面を記録した(第11図)。

土層堆積の状況は土壌層を基準とし、その他にも色調や粒度などを鑑みて把握している。基本層序は大きくⅠ～Ⅶ層として把握できる。後述する層の番号(アラビア数字)は土層断面図の番号と対応する。なお、Ⅰ層は圃場整備後、現代の水田に伴うもので、以下のⅡ・Ⅲ層も人為的な層とみられる。Ⅳ層以下が自然堆積層である。

- Ⅰ層：第1・2層(表土・床土)。現代の水田に伴うものである。
- Ⅱ層：第3層。細分していないが、上部が土壌化しており、圃場整備前の地表面と考えられる。近世の遺構が存在する。
- Ⅲ層：第5層。中世の遺物が多量に包含されており、当該期以降の整地層とみられる。次節にて報告する柱穴群はⅢ層に帰属する可能性がある。
- Ⅳ層：第6層。土壌化は見られなかったが、含まれる土器片の量が僅少で、かつ中世の土器片などを含まないことから第5層とは異なる由来の土層と捉えた。当層の上面でⅤ層水田畦畔の上部を検出した。
- Ⅴ層：第15・16層。上面は古墳時代後期の水田面となっており、現地表面からの深さは約0.5mである。当層には少数ながら弥生土器とみられる小片が含まれており、弥生時代以降の堆積層であると判断できる。
- Ⅵ層：第17～20層。第Ⅴ層とⅦ層の間に存在する堆積層については、調査範囲では堆積の様相を明瞭に把握できなかった為、一括りにⅥ層に帰属させている。
- Ⅶ層：第21層。φ1.0～5.0cmの垂円礫を主体とする礫層である。調査区壁断面の観察と合わせ、礫層は東西方向については、調査区東側が最も高く、中央部が低くなり、西側に向かって再び高くなること、南北方向については南から北に向かって傾斜することから、起伏の激しい地形をなすことが明らかになった。

調査地点は東条川との距離(約230m)や比高差(約10m)があることから、Ⅳ～Ⅶ層はいずれも東条川本流に由来する河成堆積ではなく、北側に広がる山地の谷を通り東条川へと注ぐ支流の河成堆積に伴うものの可能性が考えられる。

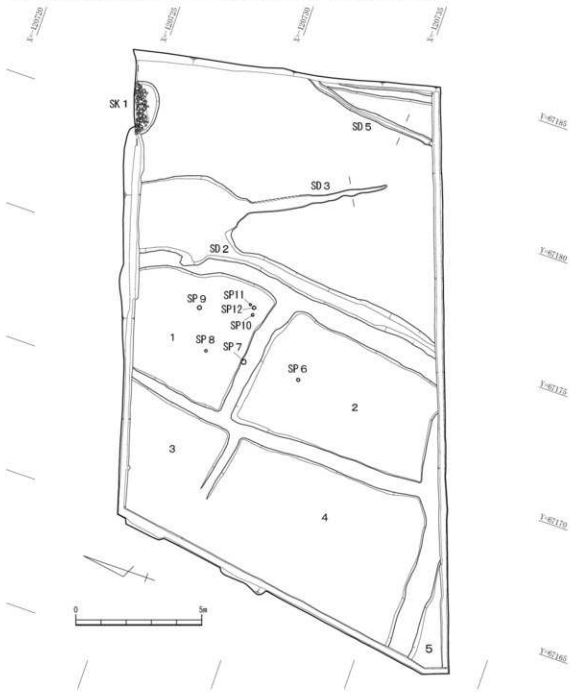
また、調査区北東端付近に位置するSK1(第4層)の底や、調査区中央の柱穴断ち割り時には湧水が確認できた。現地表面から約1.0～1.1mの深さであり、面的に湧水層が広がっている可能性がある。

なお、第6層・第15層・第17層については、西壁北西部において土壌試料を採集し、植生や稲作などの植物利用に関する情報を得ることを目的に花粉分析・植物珪酸体分析を行った。その分析結果については、第4章にて詳述する。

第3節 遺構

1. 概要

遺構は、水田畦畔とそれによって区画された水田5枚、溝3条、土坑1基、柱穴7基を検出した(第12図・写真図版4・6)。遺構は調査区の西半に多く、調査区東半に広がる礎層の上では少ない傾向が見て取れる。また、1面の調査であったため、いずれの遺構も同一面での検出となっているが、前節で述べたように、これらの遺構全てが同一の時期に帰属するわけではない。水田跡や溝は古墳時代のものと推測されるが、その他の土坑や柱穴は、出土遺物や埋土の様相から、古墳時代と推定される水田の面より上層の面に伴う遺構であったとみられる。以下、大きく時期別に報告する。



第12図 調査区平面図

2. 古墳時代の遺構

水田跡 (第13図・写真図版7)

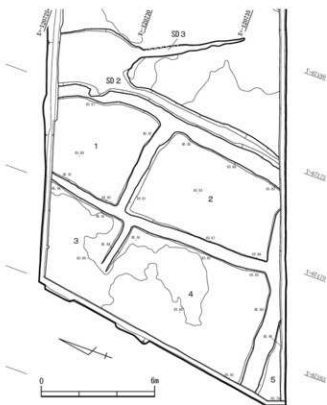
調査区西半は水田として利用されており、畦畔によって区画された計5枚の水田跡を検出した(水田番号1~5)。1枚の規模・形状のほぼ全体を把握しうるものは水田2のみである。水田2は南辺約3.8m、北辺約5.0m、西辺約8.0m、東辺約6.5mの四角形状を呈し、面積は約30.5㎡と推定される。それ以外の水田の平面形は一辺が約5.0~7.5mのおおよそ四角形状を呈するものと推定される。なお、水田1は東側に存在する溝SD2によってその形が規定されたと考えられ、東辺がゆるやかにカーブする。

畦畔の接続部は、確認できた部分については全て「T」字状になるように接続させている。幅については、水田4と5を区画する畦畔が最も広く、約1.0mであるが、他の各水田間の畦畔はおおむね約0.5~0.8mである。畦畔の上部は削平されているとみられ、本来の高さは不明であるが、残存部分は約3.0~10.0cmを測る。畦畔は、調査区壁断面の観察から、ベースの水田土壌との顕著な差異は認められず、水田土壌と同じ土であることが確認できた。したがって、耕作のたびに低くなった部分を盛り上げただけの簡易な方法で構築されたものと判断される。

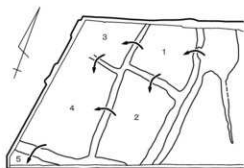
なお、水田3と水田4の間を区画する畦畔は西側が消失しており、前者については水田面も削られて凹みを有していた。この部分には、水田面を覆う堆積層とは異なる砂層(第7層)が入り込んでいた。これは洪水によって削られ、堆積したものである。

検出した5枚の水田はそれぞれ水田面の高さが僅かに異なる。第13図に示したように、水田1が最も高く、番号順に低くなっており、水田5が最も低い。このことから、調査区内の旧地形は北東部が最も高く南西部が最も低くなるが、その比高差は最大で9.0cmであり、極めて緩やかな傾斜といえる。水田1と2の水田面の高低差は約2.0~5.0cm、水田1と3の高低差は約2.0~7.0cm、水田2と4の高低差は約2.0~7.0cm、水田3と4は高低差が殆どなく、水田4と5の比高差は約4.0~6.0cmである。

水口は、SD2から水田1へと導水する際に機能したとみられる水田1の東側畦畔上しか確認できない。それ以外の各水田への水の供給は、畦畔をオーバーフローさせて行ったと考えられ、隣り合った低い方の水田へと供給したとみられる。水田1の東側畦畔上の水口は、SD2の上場を西側へと部分的に拡張することで形成されており、約1.0mの幅を以て、西側に30.0cm程入り込む。以上を踏まえ、調査区で検出した部分についていえば、溝SD2から水田1に導水し、水田1を起点として1→2・3→4



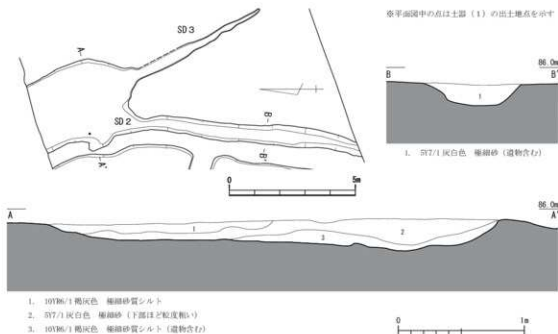
第13図 水田跡と関連遺構



第14図 水配りの想定模式図



第15図 足跡の可能性がある痕跡（水田1、北から）



第16図 SD 2 断面

→5の順に水配りがなされたと考えられる（第14図）。

なお、調査時には、水田面に人間の足跡の有無を探した。水田1において灰白色極細砂が入り込む足跡状の凹み（第15図）をいくつか確認したが、確実に足跡と判断しうるものは検出できなかった。

SD 2（第16図・写真図版8・9）

水田の東側に存在する溝である。水田に導水する水路と考えられる。SD 2は、調査区北壁から3.6mの地点で幅を大きく減じ、南に向かって二方に分岐する。SD 2から分岐して南東へと延びる溝はSD 3とした。SD 3については後述する。上述のような遺構の平面形を確認した後、二方に分岐する地点の以北と以南の2ヶ所に土層観察用畦を設け、掘削を行った。

SD 2の規模は、分岐以北は幅約3.55m、深さ12.0～25.0cmで、西側が東側よりわずかに深い。分岐点以南は幅0.78m、深さは検出面から16.0cmで断面形は蒲鉾状を呈しており、南北共に調査区外へと続く。わずかな高低差ではあるが、溝は分岐の以北の西側で最も低く、分岐に向かって高くなり、分岐以南は南へと緩やかに傾斜する。分岐より北側では、溝の上端が西側へと部分的に拡張し、畦畔に入り込む箇所が確認できた。これについては先述したように、水口の可能性を想定しておきたい。

分岐以北がなぜ幅広なのかは不明だが、可能性の一つとして溜池の役割を担うものであったことが考

えられる。ただし、分岐以北の面積は検出部で約7.0㎡である。遺構は調査区外にも続くため、全容ではないにせよ、溜池であれば規模がかなり小さいものと思われる。なお、水を溜める意味としては、①水田に導水する水量の調整のため、②河川などから直接水を引くと温度が低く、適温に調整するため、という2つが考えられるようである。

当遺構からは古墳時代後期の須恵器片が出土した。このことから、溝と水田は古墳時代後期のものである可能性が想定される。なお、第5章第1節で詳述するが、今回検出した水田畦畔は、天神付近に残る条里地割とは方角を異にする。

SD 3 (第17図・写真図版9)

調査区東半部に広がる礫層の西縁に沿い、北西から南東に向かって伸びる。溝は南に向かって徐々に浅くなり、調査区南壁には至らずに消える。溝は幅0.3m、深さ3.0cmである。SD 2と同様に埋土には灰白色の極細砂が入る。SD 3はSD 2とは対照的に南側に向かって徐々に高くなっており、SD 2に流れる水量が増した際に水を逃がすための機能を有していた可能性が考えられるが、極めて浅く、遺構の性格については不明である。



3. その他の遺構

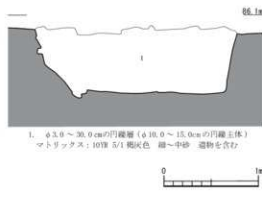
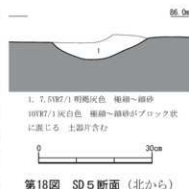
SD 5 (第18図・写真図版10)

調査区東隅で検出した溝である。SD 3と同様に、礫層に沿うように延びており、調査区外へと続く。幅は0.25m、深さは4.5～5.0cmである。南に向かって緩やかに傾斜する。

SD 5は調査区南東端で検出した水田畦畔を覆う灰白色シルト質極細砂 (15) の上から掘り込まれているため、この畦畔より相対的に後出する。ただし、この畦畔が前項で報告した水田と同一時期のものであるかは不明である。SD 5からは須恵器とみられる小片が出土しているが、これらの遺構の時期は判断しえなかった。

SK 1 (第19図・写真図版10)

調査区の北東隅で検出した。SK 1は床土直下のII層から掘り込まれており、北側が調査区外へと広がる。遺構の規模は、検出した部分で東西長2.14m、南北長0.9mを測る。本来は直径約1mの円形土坑が2つ並んでいたが、それらの肩部が崩れたものと想定される。深さは62.0～64.0cmで、土坑内には約3.0～30.0cmの河原礫(主体は10.0～15.0cm)が充填されており、その中から少量ではあるが須恵器片や近世の丹波焼播鉢、陶器などが出土した。土坑の底は調査区東半部に広がる礫層に当たっており、調査時にも湧水がみられた。当遺構は、木桶の側板・底板などは確認できていないが、平面形や湧水がみられた点などを踏まえ、近世の溜め井であった可能性が想定される。加えて、土坑を埋める際に入れられた礫は、調査区で確認された礫層を構成する礫よりも大きい亜円礫が多い。



第19図 SK 1断面 (南から)

東条川本流に伴う河原礫が用いられた可能性がある。

SP 6～12（写真図版10）

調査区中央では、7基を検出した。いずれも水田面より上のⅢ層に伴うものと考えられる。建物跡の復元はできず、柱穴の詳細な年代も不明だが、その規模、形状、灰白色の埋土が入る点から中世のものである可能性が考えられる。

これらのうち、SP 7の底からは柱の沈下を防ぐための根石と土器の小片が出土した（写真図版10-6）。

4. 小結

以上のように、天神桑里では少ないながらも、複数時期の遺構が確認できた。時期別にその概要を示したものが第2表である。

最も新しい近世の遺構として、溜め井とみられるSK 1を検出した。Ⅱ層から掘り込まれていた。次いで、柱穴は水田より上層のⅢ層に伴うものとみられ、遺構の様相や周辺での遺物の出土状況などから中世のものである可能性が考えられる。さらにその下層（Ⅴ層）で検出した水田跡については、導水用の水路とみられるSD 2から古墳時代後期の土器が出土したことが注目される。第5章にて詳述するが、水田跡が古墳時代後期のものである可能性を示す重要な資料である。水田跡は礫層を避け、安定した場で営まれたようである。なお、Ⅴ層より下層においては、遺構の存在を確認できず、側溝における断面の様相から、起伏の大きい地形をなしていたことが明らかになった。

第2表 時期別にみた検出遺構の概要

時期	層序	遺構	遺物
近世	Ⅱ層	SK 1	須恵器、丹波焼播鉢
中世（12～13世紀）か	Ⅲ層か	SP6～12	須恵器、土師器、貿易陶磁器
古墳時代後期	Ⅴ層	水田跡、SD 2・3など	須恵器

第4節 遺物

今回の調査では、遺構および包含層から遺物が出土した。以下では、大きく遺構と包含層に分けたうえで、時期別に各時代の遺物を見ていく。遺物の型式や時期については、章末の参考文献を参照した。なお、実測図は提示していないが、写真図版に掲載した遺物がある。巻末の遺物観察表と写真図版(写真図版11~17)も合わせて参照されたい。

1. 遺構に伴う遺物(第20図・写真図版11上)

SD 2 須恵器片が2点出土した。

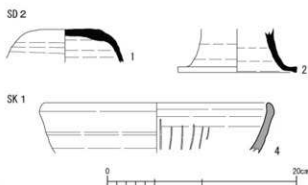
1は杯蓋である。SD 2北側畦(A-A')の北、溝の西側底から出土した。口縁部は残存していないが、端部付近で破損しているとみられ、口径は12.5cm前後であったと推測される。天井部はヘラ切り後にナデを施す。天井部のヘラケズリが省略される点により後出の特徴が見受けられるが、形状に注目すれば6世紀後半代ものとみられる。

2は長脚高杯の脚部とみられる。残存部に透かし孔などの装飾は確認できない。焼成は良好で暗灰～灰色を呈し、内面に降灰、脚端付近には自然釉がみられる。詳細な時期比定はしえないが、6世紀代のものであろう。

SK 1 遺構は大量の礫で埋められており、その中に古墳時代から近世の遺物が含まれていた。

3は須恵器甕の頭部の破片とみられる。焼成は良好で、器壁は1cmと厚く、外面に1条の沈線を有する。以上の状況からして、古墳時代のもものとみられる。

4は丹波焼の播鉢である。口縁端部を内側に短く折り曲げ、口縁部上端部はやや丸みを有する。内面にはヘラ描きによる1本単位の播目が施される。内面の摩耗は顕著ではない。以上の特徴から、長谷川編年(長谷川2022)のVI期の播鉢に該当し、15世紀後半頃のもものとみられる。

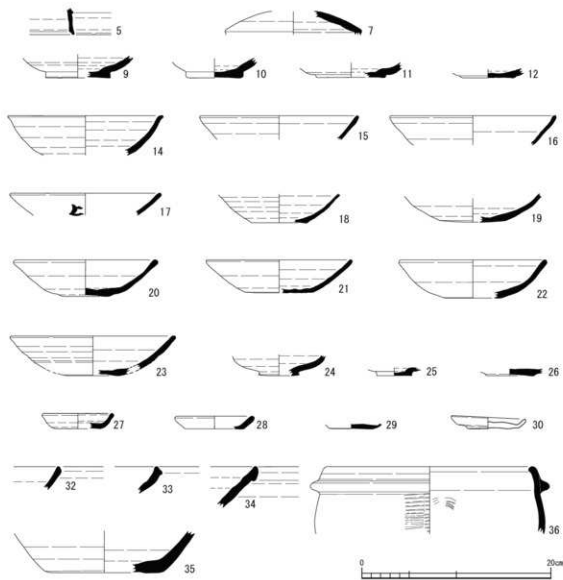


第20図 遺構出土遺物

2. その他の遺物(第21・23図・写真図版11下・12~17)

今回出土した遺物の多くが遺構に伴わないものである。包含層出土遺物の中に弥生土器と思われる小片が数点みられたが、時期、器種などは不明であった。以下では年代や器種を判断しえた遺物について、時代の古いものからみていく。

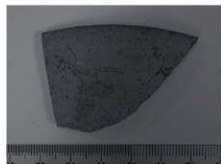
古墳時代 5は須恵器の杯蓋である。天井部と口縁部の境には明確な稜を、内面口縁端部には段を有する。陶器編年TK23・TK47型式に該当するとみられ、5世紀末葉～6世紀初頭頃のもものとみられる。6は須恵器の杯蓋である。5と比べると稜がやや甘く、内面口縁端部に稜を有さない。6世紀前半代のもものとみられる。7は長頸壺の破片である。肩部には明確な稜を有する。古墳時代後期から奈良時代前半にかけて通有の器形であるため、詳細な時期は判断しえない。8は須恵器の甕の破片である。外面は平行タタキの痕跡をナデ消し、内面には同心円当て具の痕跡がみられる。



第21図 包含層出土遺物（1）

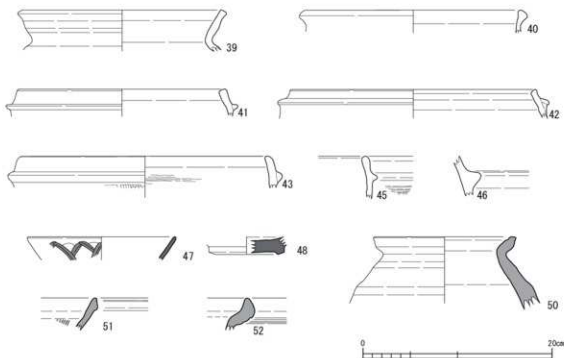
古代 9・10は須恵器の椀である。高さ7mmほどの円盤高台を有する。高台の側面はナデで調整する。以上の特徴から平安時代中期の10世紀代のもつみられる。13は体部に沈線を有する椀である。東播や北摂地域に特徴的なもので10世紀中葉以降にみられるようになる（森内2011）。14は口縁部が外反し、器壁が厚めであることから10世紀代のもつみられる。

中世 今回の調査で出土した遺物の大半を占める。



第22図 椀（17）の墨書

須恵器 11・12・15～23はいわゆる東播系須恵器の椀である。17は外面に「上」とみられる墨書が確認できる（第22図）。底部から口縁部にかけて直線状に立ち上がるもの（18・21）や、体部に屈曲を有しわずかに丸みを帯びるもの（19・20・22・23）がある。底部の調整技法を確認した11・12・19～23については、いずれも回転系切り痕を残す。これらは時間幅を持つ可能性もあるが、器形から中世前半、おおむね12～13世紀頃のもつみられる。



第23図 包含層出土遺物(2)

24・25は小碗である。いずれも円盤高台で側面調整は施さない。25は内面見込みの段が顕著である。26～29は小皿である。いずれも底部は回転系切り痕を残す。27・28は口縁部に重ね焼き痕が確認できる。これらの小碗と小皿は時期判断が難しいが、おおむね碗と同じ時期であろう。

32～35はいわゆる東播系須恵器の鉢である。いずれも小片ながら、口縁部形状にバラエティがみられる。32は口縁部の面が器壁に対して外傾する。33は口縁部の面が器壁に対して外傾し、端部が下方にわずかに突出する。34は口縁部外側に明瞭な縁帯を有する。口縁部形状に注目した佐藤分類(佐藤2022)を参照すると、32はⅢ-1 a類(12世紀後半～13世紀初頭)、33はⅢ-2類(13世紀前半～中葉)、34はⅢ-3 c類(13世紀後半～14世紀初頭)となる。35は底部片で、底部のおよそ全面に離れ砂がみられ、わずかに回転系切り痕を確認できる。

36は須恵質の羽釜である。外面は鏝より下部に平行タタキの痕跡がみられ、内面にはナゲ消されているため顕著ではないが、わずかに同心円当て具の痕跡を残す。

37・38は甕の破片である。37は外面に綾杉文タタキがみられ、内面の当て具痕はナゲ消す。いずれも東播系窯の製品であろう。

土師器 30は小皿である。焼成不良かつ摩耗が著しいが、底部には回転系切り痕を確認できる。

39・40は鍋である。残存状況が悪いが、いずれも中世前半の「播丹型鍋」といわれるタイプであろう。39は口縁部が直線的である。40は口縁端部を丸く取め、玉縁状を呈する。

41～46は羽釜である。43は外面鏝下に縦方向のハケ目、内面には横方向のハケ目を有する。45は外面鏝下に横方向の平行タタキ痕が確認できる。42は他の羽釜とは異なり、2本の粘土紐を重ねて成形したとみられる幅広の鏝が特徴的である。46も不明瞭ながら、42と同様に2本の粘土紐で鏝を成形したものとみられる。

質陶磁器 47は青磁碗である。全面施釉で外面には漣弁が施される。龍泉窯系青磁碗Ⅱ a類に該当し、13世紀初頭前後から前半のものとみられる。48は白磁碗の底部である。内面は施釉するが、削

り出しの高台は施軸せず、露胎とする。白磁碗Ⅳ類に該当するとみられ、11世紀後半から12世紀前半のものともみられる。49は青磁碗の破片である。内面にわずかに片切り彫りの文様がみられる。小片のため、詳細な分類や時期は不明だが同安窯系青磁碗の可能性がある。

陶器 50は丹波焼の甕である。口縁部内面には凹線状の段を有し、肩部は直線的である。その形状から河野編年4期(河野2022)に位置づけられ、14世紀後半のものともみられる。

近世 51・52は丹波焼の播鉢である。51は外面口縁端部に1条の沈線がめぐり、内面には最低6条を一単位とする櫛描きによる播目を有する。外面はわずかに肥厚し縁帯状となる。大平分類(大平1992)のⅢ型式に該当し、17世紀前葉のものともみられる。52は全面に施軸し、屈曲する口縁端部の外面下方に幅約3mmの沈線を2条有する。残存状況が悪いため、播目の様相など詳細は不明だが、近世以降のものであろう。

3. 小結

天神条里で検出した遺物は、古墳時代中期末～後期、平安時代中期～中世、近世の時期のものが含まれる。量的には中世前半期のものが多数を占め、その他は少量である。このうち、古墳時代後期のものは遺構から出土しているため、遺構の年代を考える上で重要である。これらを踏まえた遺跡の評価は第5章にて行うことにする。

【主要参考文献】

- 大平茂 1992『下相野窯跡(近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XⅧ—近世丹波焼の調査—)』兵庫県文化財調査報告第107冊 兵庫県教育委員会
- 岡田章一・長谷川眞 2003『兵庫津遺跡出土の土製煮炊具』『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 33-64頁
- 河野克人 2022「第4章 まとめ 第1節 中世丹波焼窯の変遷」『兵庫県産業遺跡調査報告書Ⅰ—三本峠北窯跡の調査—』兵庫県文化財調査報告書第523冊 兵庫県教育委員会 27-33頁
- 佐藤聖二 2022「第2部 土器陶磁器各論 第4章 東播系須恵器」日本中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』(新版) 真陽社 219-230頁
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 長谷川眞 2022「第2部 土器陶磁器各論 第5章 中世陶器 第6節 丹波」日本中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』(新版) 真陽社 301-314頁
- 藤本史子 2009「兵庫県下出土土師質土器類の一考察—播丹型鍋を中心として—」『考古学の視点 兵庫発信の考古学』間壁霞子先生喜寿記念論文集刊行会 429-438頁
- 森内秀造 2011「第6章 総括 第2節 出土遺物の検討」『神出雲跡群Ⅲ—神出鴨谷1号室～3号室・神出鼻谷1号室—』兵庫県文化財調査報告第407冊 兵庫県教育委員会 70-84頁
- 山田邦和「須恵器の編年 ①西日本」一瀬和夫・福永伸哉・北条芳隆編『古墳時代史の枠組み』(古墳時代の考古学1) 同成社 146-159頁
- 山本信夫「第2部 土器陶磁器各論 第7章 貿易陶磁器」日本中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』(新版) 真陽社 327-352頁

第4章 自然科学分析

パリーノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

天神条里は加東市揖鹿谷に所在し、東条川北岸の河岸段丘上に立地する。これまでの発掘調査により、複数の時期の遺構や遺物が認められる。この中には、古墳時代後期や中世以前とされる水田跡が検出されている。地形や土層の状態から、下位の礫層が低くなった部分に安定した堆積層が形成され、水田として利用されたと推定されている。

本分析調査では、水田とされる土層を対象として、花粉分析と植物珪酸体分析を実施し、当該期の植生、稲作などの植物利用に関する情報を得る。

1. 試料

試料一覧を第3表に示す。

第3表 試料一覧

調査区内では、礫層の上位に砂～シルトを主体とした土層が見られ、古墳時代や中世など複数の時期の水田層や遺構検出が認められる。

試料番号	調査番号	採取場所	層位	時期	備考
サンプル①	2021005	西壁	15層	古墳時代後期か	水田土壌
サンプル②	2021005		6層	古墳時代後期以降 中世以前	水田面 堆積層
サンプル③	2021005		17層	古墳時代以前	水田下層 土壌層

今回は、西壁で3点(サンプル①～③)の土壌試料が採取された。

サンプル①は古墳時代後期の可能性が指摘される水田土壌の15層、サンプル②は古墳時代後期以降中世以前の水田面堆積層とされる6層、サンプル③は古墳時代以前の水田下層土壌層とされる17層より、それぞれ得られたものである。室内で観察すると、いずれも土色がにがい黄橙色、土質は粘土質砂である。

分析に際しては、これら3点を用い、花粉分析と植物珪酸体分析で同一試料を分割した。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)、三好ほか(2011)などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

(2) 植物珪酸体分析

各試料を5g前後(湿重)で秤量し、絶乾重量測定などの試料調整、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分

離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定・計数する。また、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個体以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める（100単位にする）。

なお、今回は杉山（2000）を参考として主な分類群の推定生産量（kg/m²・cm）を求める。推定生産量は機動細胞珪酸体の含量（個/g）に土壌の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個体当たりの植物体乾重；単位：10⁻⁵g）をかけて、面積1m²で層厚1cm当たりの植物体の生産量を求めたものである。分類群の換算係数は、イネ属（赤米の地上部）が2.94、タケ亜科（メダケ属として）が0.48、ヨシ属が6.31、ススキ属が1.24を用いる。この結果も表中に併記する。また、各分類群の植物珪酸体含量を図示する。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を第4表に示す。

サンプル①～③のいずれも分析残渣が少なく、また検出される花粉化石数も少ない。わずかに検出された花粉化石も花粉外膜が破損あるいは溶解している状態であり、保存状態は悪いと言える。

木本花粉のツガ属、マツ属、コナラ属コナラ亜属、草本花粉のイネ科などが僅かに認められるに過ぎない。

(2) 植物珪酸体分析

結果を第5表、第24図に示す。

サンプル①～③からは、植物珪酸体が検出される。ただし、保存状態が悪く、検出される分類群の数も少ない。植物珪酸体含量はサンプル①が20,500個/g、サンプル②が15,600個/g、サンプル③が19,100個/gであり、2万個/g前後を示す。

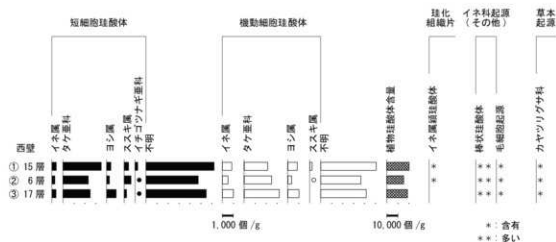
いずれの試料からも、栽培植物であるイネ属が産出する。その含量は概して少なく、サンプル③の機動細胞珪酸体を除いて、1,000個/gに満たず、サンプル③の機動細胞珪酸体も1,000個/g程度である。サンプル①と②では糊殻（穎）に形成されるイネ属穎珪酸体も検出される。

この他にタケ亜科、ヨシ属、ススキ属などが見られる。多くの場合、タケ亜科にはメダケ属やクマザサ属に含まれる複数の分類群（チシマザサ節やネザサ節など）が見られるが、今回見られたタケ亜科は保存状態が悪く、細分には至らない。なお、いずれの試料でも、植物珪酸体含量ではタケ亜科が目立つが、植物体の推定生産量（kg/m²・cm）ではイネ属やヨシ属が多い。

なお、これら3点ではイネ科起源（棒状珪酸体、長細胞起源、毛細胞起源）も見られるが、分類群の

第4表 花粉分析結果

種 類	西壁		
	15層 サンプル①	6層 サンプル②	17層 サンプル③
木本花粉			
ツガ属	-	1	-
マツ属	2	2	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	1
草本花粉			
イネ科	1	-	2
不明花粉			
不明花粉	-	1	-
シダ類胞子			
シダ類胞子	3	15	26
合 計			
木本花粉	2	3	1
草本花粉	1	0	2
不明花粉	0	1	0
シダ類胞子	3	15	26
合計（不明を除く）	6	18	29



乾土 1gあたりの個数で示す。●○は100個未満を定性的に示す。

第24図 植物珪酸体含量

特定には至らない。また、イネ科以外の草本類としてカヤツリグサ科の葉部に形成される植物珪酸体も検出される。

第5表 植物珪酸体分析結果

分類群	西壁 (個/g)		
	15層 サンプル①	6層 サンプル②	17層 サンプル③
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ属	400	300	400
タケ亜科	3,500	2,300	2,500
ヨシ属	400	300	900
ススキ属	400	600	200
イチゴツナギ亜科	200	<100	<100
不明	6,200	4,800	5,500
イネ科葉部長細胞珪酸体			
イネ属	900	500	1,000
タケ亜科	2,200	2,500	3,200
ヨシ属	900	400	1,000
ススキ属	200	<100	-
不明	5,100	3,700	4,200
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	11,200	8,400	9,600
イネ科葉部長細胞珪酸体	9,300	7,200	9,500
植物珪酸体含量	20,500	15,600	19,100
単位面積(層厚1cm)当たりの植物体生産量(単位: kg/m ² ・cm)			
イネ属	0.26	0.16	0.30
タケ亜科	0.10	0.12	0.16
ヨシ属	0.55	0.23	0.65
ススキ属	0.03	0.01	-
珪化組織片			
イネ属珪酸体	*	*	-
イネ科起源(その他)			
棒状珪酸体	**	**	**
毛細胞起源	*	*	*
草本起源			
カヤツリグサ科	**	*	*

含量は、10の位で丸めている(100単位にする)
合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている
<100: 100個/g未満
-: 未検出、*: 含有、**: 多い
土壌の仮比重を1.0と仮定

4. 考察

西壁土層断面より採取された、古墳時代以前の水田下層土層とされる17層(サンプル③)、古墳時代後期以降中世以前の水田面堆積層とされる6層(サンプル②)、古墳時代後期の可能性が指摘される水田土層の15層(サンプル①)を対象とした花粉分析、植物珪酸体分析の結果、花粉分析では花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことが難しかった。

花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合は、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性が挙げられる。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村1967; 徳永・山内1971; 三宅・中越1998など)。僅かに検出された花粉化石は、花粉外膜が破損・溶解している状態であり、保存状態が悪かった。また検出された花粉化石は比較的分解に強いものや分解が進んでも同定可能なものであった。そのため、花粉が検出されなかった理由としては堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が経年変化により分解・消失したことが考えられる。

一方、植物珪酸体分析では植物珪酸体が検出されたものの、保存状態が概して悪く、検出される分類群の数も少なかった。3点からは栽培植物であるイネ属が産出した。その含量は概して少なく、サンプル③の機動細胞珪酸体を除いて1,000個/gに満たず、サンプル③の機動細胞珪酸体も1,000個/g程度である。安定した稲作が行われた水田跡の土壌では、栽培されていたイネ属の植物珪酸体が土壌中に蓄積され、植物珪酸体含量(植物珪酸体密度)が高くなる。水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体(機動細胞由来)が試料1g当り5,000個以上の密度で検出された場合に、そこで稲作が行われた可能性が高いと判断されている(杉山2000)。ただし、3点ともにイネ属の植物体の推定生産量がヨシ属に次いで多かった点を考慮すれば、いずれの層位も形成された頃にヨシ属とともにイネ属が多かったと考えられる。ヨシ属が湿潤な場所に生育することから、水分のある土地にイネ属が栽培されていた可能性が想定される。そのため、調査地点では古墳時代以前には既に水田で稲作が行われ、古墳時代後期でも水田稲作が営まれ、その後の中世以前でも水田面の稲作が考えられる。なお、イネ属の含量が少ない点は、土層内での植物珪酸体の蓄積が少なかったことを反映する。この要因には、稲作の期間が短いために水田への植物珪酸体の供給量が少なかったことや収穫後の植物体が外部へ持ち出されたことなどが想定されるが、今後さらに発掘調査所見を含めて検討する必要がある。

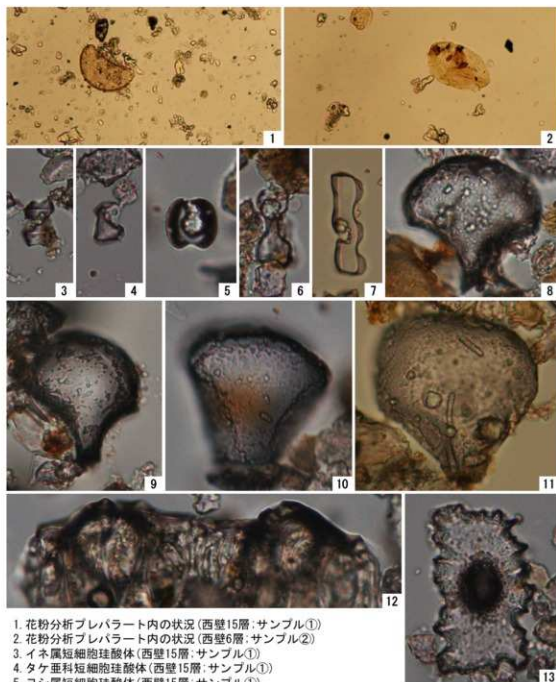
また他に検出された分類群からは、3つの層位が形成された頃に、いずれもタケ亜科をはじめとしてススキ属などイネ科の生育がうかがえる。植物珪酸体含量の多かったタケ亜科については、植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されている(近藤1982; 杉山・藤原1986)。今回の産状は、他の種類よりも残留しやすかったことを反映すると考えられる。

その他、カヤツリグサ科の植物珪酸体も検出されたことから、いずれの時期も草本のカヤツリグサ科がイネ科とともに生育していたと考えられる。また僅かに検出された花粉化石の種類から、周辺にツガ属やマツ属などの針葉樹や、コナラ属コナラ亜属などの落葉広葉樹が生育していたと考えられる。

【引用文献】

- 近藤純三1982『Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究』昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書 32頁
- 近藤純三2010『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会 387頁
- 三宅尚・中越信和1998『森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態』『植生史研究』6 15-30頁
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子2011『日本産花粉図鑑』北海道大学出版会 824頁
- 中村純1967『花粉分析』古今書院 232頁
- 中村純1980『日本産花粉の標識 I II(図版)』『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第12・13集 91頁
- 島倉巳三郎1973『日本植物の花粉形態』『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第5集 60頁
- 杉山真二2000『植物珪酸体(プラント・オパール)』辻誠一郎(編著)『考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社 189-213頁
- 杉山真二・藤原宏志1986『機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—』『考古学と自然科学』19 69-84頁
- 徳水重元・山内輝子1971『花粉・胞子』『化石の研究法』共立出版株式会社 50-73頁

第25図 花粉分析プレパラート内の状況・植物珪酸体



1. 花粉分析プレパラート内の状況(西壁15層:サンプル①)
2. 花粉分析プレパラート内の状況(西壁6層:サンプル②)
3. イネ属短細胞珪酸体(西壁15層:サンプル①)
4. タケ亜科短細胞珪酸体(西壁15層:サンプル①)
5. ヨシ属短細胞珪酸体(西壁15層:サンプル①)
6. ススキ属短細胞珪酸体(西壁15層:サンプル①)
7. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(西壁15層:サンプル①)
8. イネ属機動細胞珪酸体(西壁6層:サンプル②)
9. イネ属機動細胞珪酸体(西壁17層:サンプル③)
10. タケ亜科機動細胞珪酸体(西壁17層:サンプル③)
11. ヨシ属機動細胞珪酸体(西壁17層:サンプル③)
12. イネ属縮珪酸体(西壁6層:サンプル②)
13. カヤツリグサ科葉部珪酸体(西壁15層:サンプル①)

50 μ m

(1, 2)

50 μ m

(3-13)

第5章 まとめ

第1節 水田跡の評価と周辺の条里地割

本節では、第3章第3節にて、古墳時代の遺構として報告した水田跡の評価について、時期比定の根拠も含め言及する。

1. 水田跡の考古学的評価

発掘調査で検出される水田跡については、概して遺物が少なく、時期比定が困難な場合が多い。今回の調査でも、水田面の直上や畦畔内に遺物は含まれていなかった。ただし、導水用の水路SD2から古墳時代後期の須恵器2点が出土した。発掘調査成果に基づき、水田の年代を推定するならばこれらの土器が参考となる。

なお、第4章の自然科学分析の結果からは、土層中におけるイネ属の植物珪酸体の含量が少なく、水田としての利用期間が短かった可能性が指摘されている。

2. 周辺の条里地割

天神条里という遺跡名が示す通り、調査地点周辺は条里地割の残りが良い地域であった。近年、その様相を窺うことは難しくなりつつあるが、古い地図を確認すれば、その様相は明瞭である。第26図には1972年発行の周辺地図と、同図に基づく条里地割の復元案を示した。これによれば、周辺には2つの基準による条里地割が展開したことが分かる。調査地点付近の天神地区周辺に注目すれば、東条川北岸にN 28°Wを基準とする条里地割がみられる。対岸の様相はやや不明瞭だが、天神地区南西の一部にも同一基準の地割が一部確認できる。これに対し、北東方に位置する秋津・長貞地区では、N33°Eを基準とする条里地割が展開したとみられる。

今回の調査で検出した水田畦畔や溝の方向は、およそ南北方向を指向し、天神周辺の条里地割の基準(N 28°W)とは異なる。当該地域における条里施工の時期は判断しえないが、検出遺構と地割の方向の不一致を積極的に評価するならば、水田跡が条里施工以前のものである可能性を指摘できよう。ただし、他地域の事例をみると、一町の区画内における小区画ならびに畦畔の方向が、必ずしも条里のそれと対応するわけではない。地割の方向との関係のみで時期を比定することには慎重にならねばならない。

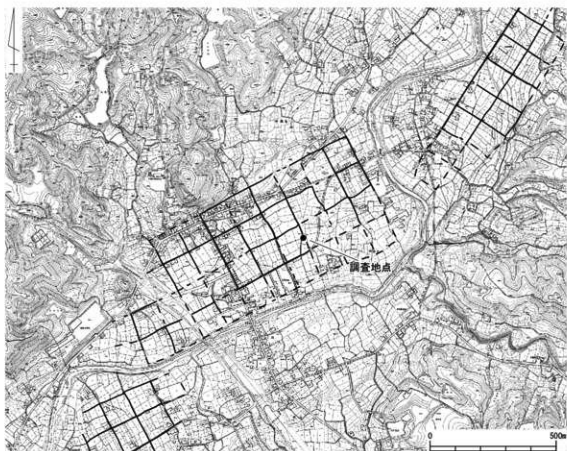
3. 小結

以上をまとめると、以下の3点に要約される。①発掘調査成果に基づく水田跡は古墳時代後期の可能性が高い。②イネ属の植物珪酸体の含量の少なから、水田の利用期間は短かった可能性がある。③畦畔と溝の状況から条里施工以前の水田の可能性もある。

これらのうち、①と③が水田跡の年代に関する事項になるが、互いに矛盾しないことから、検出した水田跡は古墳時代後期のもので、短期間の利用であったと結論づける。



地図出典：国土地理院 1972「東条町全城図 No. 7」・「No. 8」・「No. 11」・「No. 12」



第26図 周辺地図（上）と条里地割の復元案（下）

第2節 周辺遺跡からみた位置付け

天神条里の発掘調査では複数時期の遺構と遺物を確認した。最後にまとめとして、今回の主な調査成果である古墳時代後期と中世を対象に、周辺遺跡も含めた位置付けを述べる。

1. 古墳時代後期

今回の主な調査成果として、古墳時代後期とみられる水田跡の検出が挙げられる。水田は礫層を避け、安定した場を選んで営まれたようだが、その利用期間は極めて短かったようである。

周辺遺跡を見渡すと、古墳に加え、栲鹿谷・松ノ下遺跡、森・番田遺跡、黒谷・岡ノ上遺跡など、東条川の両岸にて当該期の竪穴建物跡などの遺構が検出されており、周辺に集落が展開したことが明らかである。天神条里で検出された水田跡は、これらの集落に伴う生産域であった可能性があり、東条川流域における古墳時代の生産活動の一端を示すものと位置付けることができる。

2. 中世

遺構は希薄ながら、今回の調査で出土した遺物の多くが中世、特に前半期に帰属する。これらは、中世以降の整地層に伴うもので、調査地点は集落域の縁辺にあたる可能性がある。当該期の遺跡に通有の須恵器の供膳具・貯蔵具・調理具、土師器の供膳具や煮炊具の出土に加え、青磁や白磁などの貿易陶磁器が含まれる点は注目される。なお、主体を占めるのは須恵器であり、畿内や近接する三田盆地（北摂津）、丹波でみられる瓦器は全く出土していない。このような土器様相は、旧東条町周辺、引いては播磨地域に共通する。

また、第1章第2節で述べたように、周辺では、中世前半期の遺跡が複数調査されている。これらの中には、多数の掘立柱建物跡や貿易陶磁器が副葬された木棺墓もあり、周辺の繁栄の一端を垣間見ることができる。その背景の一つとして、当該地域が加古川流域と三田盆地とを結ぶ重要な交通ルート上に位置したことが考えられる。周辺の条里地割における余剰帯は判断しえず、道路の存在や位置は今後の検討課題であるが、古代には栲鹿廃寺が存在し、古代寺院は交通の要衝に建立される場合が多い点（菱田2013・梶原2017など）や、近世には京街道・大坂街道が通る点などは先の考えの傍証となろう。今後の発掘調査事例の増加、成果の蓄積が期待される。

【主要参考文献】

- 菱田哲郎2013『古代寺院と地域社会 ～交通機能を中心に～』『古代寺院と律令体制下の京都府～なぜそこに寺はあのか～』京都府埋蔵文化財研究会
- 梶原義実2017『古代地方寺院の造営と景観』吉川弘文館
- 山田清朝・甲斐昭光・高瀬一嘉編1992『川除・藤ノ木遺跡―武東川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』兵庫県文化財調査報告第104冊 兵庫県教育委員会

附表。 遺物観察表

報告番号	器質	器種	出土位置	残存状況	口径	底径	器高	成形上の特徴	備考	図版	写真撮影
1	須恵器	杯蓋	SD 2	天弁部完存	—	—	(3.5)	天弁部：ヘラ切り後ナデ	焼成やや不良	20	11上
2	須恵器	高杯	SD 2	脚端部1/4	—	(12.4)	(4.6)	—	底径の欄の数値は脚部径。内面に腐食・自然傷みられる	20	11上
3	須恵器	甕小	SK 1	不明	—	—	(5.2)	—	外面に1条の沈線	—	11上
4	陶器	椀鉢	SK 1	口縁1/12	(23.5)	—	(5.3)	—	丹波焼。内面の摩耗みられず	20	11上
5	須恵器	杯蓋	包含層	口縁1/12以下	—	—	(2.8)	—	—	21	11下
6	須恵器	杯蓋	包含層	不明	—	—	—	—	—	—	11下
7	須恵器	長柄盥	包含層	脚部1/9	(14.5)	—	(2.5)	—	口径の欄の数値は脚部径を示す	21	11下
8	須恵器	甕	包含層	不明	—	—	—	外面：平行タタキナゲ溝し。 内面：同心円当て具	—	—	11下
9	須恵器	椀	包含層	底面1/3	—	(6.8)	(2.3)	—	—	21	12
10	須恵器	椀	包含層	底面2/3	—	(5.3)	(2.1)	底部：回転糸切り	焼成やや軟質	21	13
11	須恵器	椀	包含層	底面2/9	—	(7.3)	(1.6)	底部：回転糸切り	内面に重ね焼き痕	21	13
12	須恵器	椀	包含層	底面1/2	—	(5.3)	(1.6)	底部：回転糸切り	—	21	13
13	須恵器	椀	包含層	不明	—	—	—	—	沈線を有する	—	13
14	須恵器	椀	包含層	口縁1/12	(16.2)	—	(4.2)	—	重ね焼き痕明瞭	21	13
15	須恵器	椀	包含層	口縁1/6	(16.5)	—	(2.5)	—	重ね焼き痕明瞭	21	13
16	須恵器	椀	包含層	口縁1/8	(17.4)	—	(3.1)	—	重ね焼き痕明瞭	21	13
17	須恵器	椀	包含層	口縁1/9	(15.6)	—	(2.4)	—	墨書「上」あり	21	13
18	須恵器	椀	包含層	底面1/4	—	(5.9)	(3.1)	底部：回転糸切り	内面見込みに層状の痕跡あり	21	13
19	須恵器	椀	包含層	底面5/12	—	(7.0)	(3.0)	底部：回転糸切り	焼成やや不良	21	12
20	須恵器	椀	包含層	口縁1/4 底面1/2	(14.4)	(4.4)	3.9	底部：回転糸切り	重ね焼き痕明瞭。焼成やや不良	21	12
21	須恵器	椀	包含層	口縁1/2 底面1/4	(15.2)	(7.2)	3.5	底部：回転糸切り後ナデ	重ね焼き痕明瞭	21	12
22	須恵器	椀	包含層	口縁1/6 底面1/12	(15.2)	(6.0)	(4.1)	底部：回転糸切り	粘土に7mmの小石を含む。焼成やや甘い	21	12
23	須恵器	椀	包含層	口縁1/12 底面1/4	(17.0)	(6.4)	4.2	底部：回転糸切り	—	21	12
24	須恵器	小椀	包含層	底面1/6	—	(4.3)	(2.2)	底部：回転糸切り	—	21	14
25	須恵器	小椀	包含層	底面1/4	—	(3.7)	(0.9)	底部：回転糸切り	—	21	14
26	須恵器	小皿	包含層	底面完存	—	5.2	(0.7)	底部：回転糸切り	転用確の可能性あり	21	14
27	須恵器	小皿	包含層	口縁1/8 底面1/5	(7.3)	—	1.6	底部：回転糸切り	重ね焼き痕明瞭。底面外面に粘土残存	21	12
28	須恵器	小皿	包含層	口縁1/8	(7.9)	(6.2)	1.4	底部：回転糸切り	重ね焼き痕明瞭	21	14

報告番号	器質	器種	出土位置	残存状況	口径	底径	器高	成形上の特徴	備考	図版	写真図版
29	灰土器	小皿	包含層	底面完存	—	(4.7)	(9.6)	底面：回転糸切り		21	14
30	土師器	小皿	包含層	口縁わずか・底面完存	(7.7)	4.7	(1.4)	底面：回転糸切り	全体に表面の摩耗著しい	21	12
31	土師器	小皿	包含層	底面1/2	—	(5.5)	(1.3)	底面：回転糸切り	全体に表面の摩耗著しい	—	14
32	灰土器	鉢	包含層	口縁わずか	—	—	(2.4)	—	底面焼き痕明瞭	21	15上
33	灰土器	鉢	包含層	口縁わずか	—	—	(2.6)	—		21	15上
34	灰土器	鉢	包含層	口縁わずか	—	—	(4.3)	—	底面焼き痕明瞭	21	15上
35	灰土器	鉢	包含層	底面1/9	—	(12.6)	(4.4)	底面：回転糸切り	底面ほぼ全面に薄れ砂の付着あり	21	15上
36	灰土器	羽釜	包含層	口縁1/18	(21.5)	—	(7.1)	外面：平行タタキ 内面：当て具痕ナズ消し		21	15上
37	灰土器	甕	包含層	不明	—	—	—	外面：綾形タタキ 内面：当て具痕ナズ消し		—	15上
38	灰土器	甕	包含層	不明	—	—	—	外面：平行タタキ 内面：当て具痕ナズ消し		—	15上
39	土師器	鍋	包含層	口縁1/9	(20.9)	—	(4.4)	—	外面にスス付着	23	16
40	土師器	鍋	包含層	口縁1/18	(22.7)	—	(2.4)	—	内面口縁部と外面にススの付着みられる	23	16
41	土師器	羽釜	包含層	口縁1/4	(21.5)	—	(2.9)	—	摩耗著しく調整不明瞭	23	12
42	土師器	羽釜	包含層	口縁1/12	(25.6)	—	(3.6)	—		23	16
43	土師器	羽釜	包含層	口縁1/12	(25.4)	—	(3.3)	内外面：ハケ目		23	16
44	土師器	羽釜	包含層	口縁わずか	—	—	(4.9)	—		—	16
45	土師器	羽釜	包含層	口縁わずか	—	—	(4.5)	外面：平行タタキ 内面：ハケ目？	焼成不貞、表面の摩耗著しい	23	16
46	土師器	羽釜	包含層	胴部わずか	—	—	(4.1)	—		23	16
47	青磁	甕	包含層	口縁1/8	(15.6)	—	(2.5)	—	龍泉窯系青磁細目a型	23	15F
48	白磁	甕	包含層	底面1/4	—	(8.0)	(1.9)	—	白磁細目IV類か	23	15F
49	青磁	甕	包含層	—	—	—	—	—	片切り筋り文あり、同定系否か？	—	15F
50	陶器	甕	包含層	口縁1/26 胴部1/6	(14.6)	—	(7.7)	—	丹波焼、内面の摩耗みられず	23	17
51	陶器	楕鉢	包含層	口縁わずか	—	—	(3.5)	—	丹波焼、焼成整順、内面に1単位未満の掻目全無す	23	17
52	陶器	楕鉢	包含層	口縁わずか	—	—	(2.4)	—	丹波焼、内外面に輪縁	23	17

①内に示した数値は、口径・底径の項では器元径を、器高の項では残存高を表す。

写真図版



1. 遠景（西上空から）



2. 遠景（南東上空から）



1. 遠景（東上空から）



2. 遠景（北西上空から）



1. 近景（南西上空から）



2. 近景（北西上空から）



調査区全景 俯瞰写真 (写真上が東)

1. 調査前の状況
(東から)



2. 調査前の状況
(西から)



3. 人力掘削状況





1. 全景（東から）



2. 全景（北東から）



3. 西壁断面（北東から）



1. 調査区西半の水田跡（北から）



2. 水田1～4畦畔接続部（北から）



3. 水田2東側畦畔とSD2（北から）



4. 水田4南畦畔断面（東から）



5. 水田畦畔検出作業



1. SD2・3 検出状況
(北から)



2. SD2・3 全景
(北から)



3. SD2 断面 (A-A')
(北から)

1. SD2断面 (B-B')
(北から)



2. SD2遺物(1)出土状況
(北東から)



3. SD3断面
(北から)





1. SK 1 検出状況（南から）



2. SK 1 断面（南から）



3. SD 5 断面（北から）



4. SD 5 完掘状況（北から）



5. SP 6 断面（西から）



6. SP 7 断面（北から）



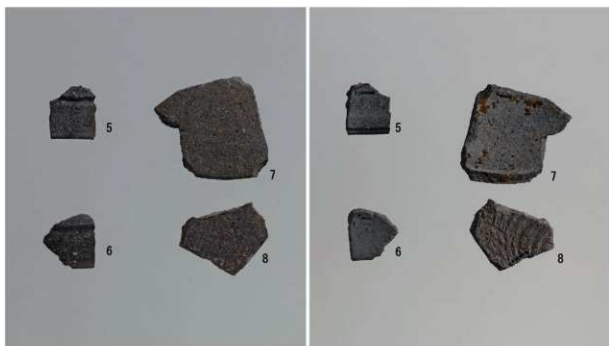
7. 遺構実測作業



8. ラジコンヘリによる空中写真撮影



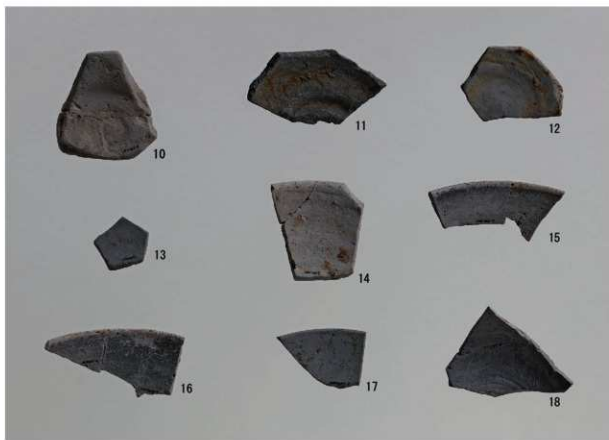
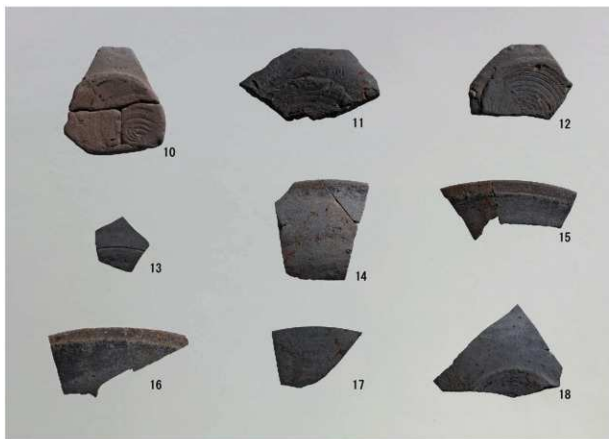
遺構出土遺物



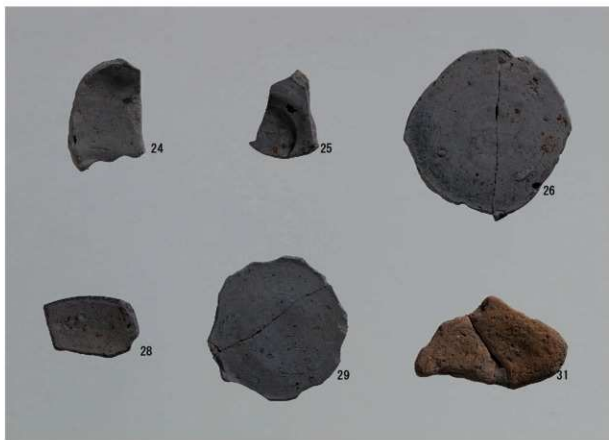
包含層出土土器 (1)



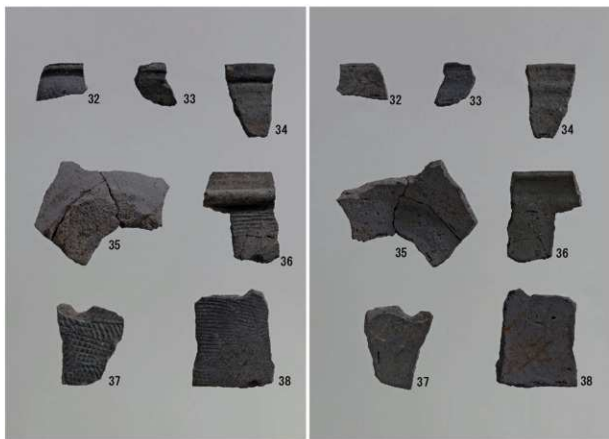
包含層出土土器 (2)



包含層出土土器 (3)



包含層出土土器 (4)



包含層出土土器 (5)



包含層出土質易陶磁器



包含層出土器 (6)



包含層出土陶器

報 告 書 抄 録

ふりがな	てんじんじょうり							
書名	天神条里							
副書名	(主)小野藍本線 天神バイパス 社会資本整備総合交付金事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第534冊							
編著者名	稲本悠一							
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 (兵庫県立考古博物館内) TEL. 079-437-5561							
発行機関	兵庫県教育委員会							
所在地	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号 TEL. 078-362-3784							
発行年月日	令和6 (2024) 年3月25日							
資料保管機関	兵庫県立考古博物館							
所在地	〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号 TEL. 079-437-5589							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間 (遺跡調査番号)	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
天神条里	兵庫県加東市 橘鹿谷	28228	250057	34度 54分 34秒	135度 4分 6秒	2021051~20210618	本発掘 261㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
天神条里	集落・ 生産 遺跡	古墳時代後期	水田・溝・畦畔・ 柱穴・土坑	須恵器・土師器・陶器・ 貿易陶磁器				
要 約	<p>天神条里の発掘調査では古墳時代後期・中世・近世の遺構と遺物を確認した。 最も新しい近世の遺構としては竈め井を検出した。次いで、遺構は確認できなかったが、中世の土器がまとまって出土しており、付近に集落が存在した可能性が想定される。</p> <p>また、中世以前のある時期には水田として利用されていたことが明らかになった。水田の時期は、導水用の水路とみられる溝から古墳時代後期の土器が出土したことや、検出した水田畦畔の方向が、調査地点付近に残存する条里地割の方向 (N28° W) とは異なることから、条里施工以前のもものと捉えられる。以上の2点を踏まえると、検出した水田は古墳時代後期のものである可能性が考えられる。</p>							

兵庫県文化財調査報告 第534冊

加東市

天神条里

— (主)小野藍本線 天神バイパス 社会資本整備総合交付金事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

令和6(2024)年3月25日 発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
(兵庫県立考古博物館内)

発行：兵庫県教育委員会
〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷：福田印刷工業株式会社
〒658-0026 兵庫県神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号
